

解題 戦後出版文化史から見た「社会文化史データベース——性風俗稀少雑誌コレクション」

立教大学教授 石川 巧

1 カストリ雑誌の衰退と性風俗雑誌の水脈

敗戦後、外地の製紙工場を失った日本は未曾有の紙飢饉に陥る。GHQ/SCAP の占領政策により印刷用紙は配給制となり、戦前から続く既成出版社はのきなみ苦境に立たされる。そうしたなか、統制外のセンカ紙やザラ紙をヤミで仕入れた新興出版社による粗悪雑誌が巷に氾濫する。いわゆるカストリ雑誌ブームである。

カストリ雑誌は、戦後の大衆娯楽雑誌のなかでも、特に戦時中に抑圧されていた性愛を描いた作品を中心とした読物雑誌の総称である。その多くはB5判でページ数は40頁前後。装幀は表紙に女性の裸体や奇抜な姿態を描き、ホッチキスで綴じただけの簡素なものが多かった。内容は読物、娯楽、風俗、実話、話題、犯罪、探偵など多岐に互っているが、いずれも読み切り記事であり季刊や月刊という定期刊行物のスタイルは取っていない。著名作家の小説や随筆を掲載して娯楽雑誌としての魅力を追求したもの、実際の取材に基づいたルポルタージュやニュース記事もあるが、短期間で消えていった雑誌ほど記者やライターがアルバイトで仕上げた通俗読物が大半を占めている。なかには表紙だけが妙に煽情的で中身はスカスカという雑誌も珍しくない。だが、戦時中の厳しい言論統制に疲弊していた人々はこうしたカストリ雑誌を貪り読むことで官能の刺激に身を委ねた。エロスはまさに自由の象徴だった。逆にいえば、そうしたいかがわしさ、当たり外れの大きさゆえに、カストリ雑誌は戦後混乱期を特徴づけるアイテムのひとつとして語り継がれてきたのである。

カストリ雑誌が一世を風靡したのは1946年から1949年頃までのわずかな期間である。1948年の末からは、急激なインフレがはじまったため、翌年には淘汰されてしまう。紙代、印刷代の高騰により出版業界も不況に陥る。GHQ/SCAP から閉鎖期間に指定された旧日配¹が支払い延期の声明を出したことで、2000社もの出版社が倒産に追い込まれる。表紙や記事タイトルだけが過激で内容がともなわない羊頭狗肉のカストリ雑誌はこうして急速に飽きられていくのである。

今回のデータベースに収められている『りべらる』『千一夜』『怪奇雑誌』『青春タイムス』『青春ロマンス』『読切ロマンス』『奇抜探究』『怪奇世界』『怪奇秘話』『オール・ロマンス』は、そのカストリ雑誌のなかで1950年代まで生き延びた残党ということになる。戦後、GHQ/SCAP は占領政策を効率よく進め日本人を飼い慣らすため徹底した検閲²を行っていたが、1949年10月末にはGHQ/SCAP のCCD（民間検閲局）が解散するため、これらの雑誌は、まさに日本の出版物が真の意味で表現の自由を獲得した直後に発行されたものである。詳細を述べる余裕はないが、そこにはGHQ/SCAP の目に見えない弾圧に怯えていた出版人の鬱積した思いが噴出しているのである。

ところで、こうした戦後の性風俗出版史の隆盛と衰退を考えるうえで忘れてならないのは、それを戦後占領期の数年間に起こった一時的なブームとして捉えることで見失われてしまう問題があまりにも多いということである。たとえば、カストリ雑誌の源流は1920年代に伊藤竹酔や梅原北明らが関わったエログロナンセンスのアングラ出版物を源流としている。1926年に創刊された会員雑誌『変態資料』（文芸資料編集部）、1928年から1931年まで幾度

も発禁処分を受けながら継続された雑誌『グロテスク (GROTESQUE)』などの編集方針が模倣されている。責め絵で知られる伊藤晴雨をはじめ、戦後のアングラ出版界で活躍した多くの才能がそれらの雑誌から見出されている。当然、戦後のカストリ雑誌に関わった出版人のなかには戦前のエログロナンセンス雑誌に携わった編集者や寄稿者が数多くいる。彼らのなかには、性風俗出版を通して戦時中の言論統制で封じられていた表現の自由を奪還しようとする闘士もいたし、戦後の世相を憂慮し、人々の荒んだ心に訴えかけるような特集を組もうとする良識派も少なくなかった。もちろん、夢よう一度とばかりにエロを売り物にした雑誌で一攫千金を狙った山師たちも多かっただろうが、いずれにしても、性風俗出版の領域においては戦前と戦後が裏でつながっているのである。

ただし、猥褻物頒布等の罪（刑法 175 条）に問われることを懼れたアングラ出版関係者は、数多くのペンネームを使い分けて雑誌の創刊と廃刊を繰り返した。当局の弾圧や処罰を回避するため、同じ人物が複数の出版社を経営して隠れ蓑とした。したがって、戦後の性風俗雑誌を考えるためには個々の出版社や雑誌の特徴を明らかにすると同時に、多くの雑誌を渡り歩いた人々の動きに迫らなければならない。雑誌の編集・出版に携わった関係者の証言をもとに点と点を結び、地下水脈として全体の動きを把握する必要がある。そこに見えてくる地下水脈は手繰り寄せようとすればするほど真相から遠のいてしまうような倒錯した世界だが、今回のデータベースのように、誌面をすべて閲覧できる環境を充実させていくことで事実を蓄積していくしかない。

そこでやや時代を遡り、日本における性研究、性体験告白書の系譜をたどってみよう。日本における性研究雑誌の嚆矢とされるのは、小倉清三郎が設立した相対会による『相対会研究報告』（小倉清三郎の死後、妻の小倉ミチヨが故小倉清三郎研究報告会顕彰会第一組合相対会の名称で 1952 年に全 34 冊を復刻出版している。また、同書は 1986 年にも銀座書館から復刻版が刊行されている）である。当時、東京帝国大学哲学科の学生だった小倉は性心理学、性科学、精神分析学を研究するために、論文、資料、考証参考の三部門による相対会を設立し、性体験手記を募ったうえでガリ版での会員頒布を行った。発足当時の会員は裁判官、検事、弁護士をはじめ、医師、大学教授、代議士、華族、芸術家まで幅広い知識人、富裕層を含んでおり、復刻版に収録された「相対会第一組合特別会員と恩人」リストには坪内逍遙、薄田泣菫、金子光晴、芥川龍之介、大杉栄、伊藤野枝、辻潤、平塚雷鳥、中村吉右衛門などが名を連ねている。同時代の記事で人気があったのは、性体験手記の他、江戸の春本春画、世界各地のボルノ翻訳などであった。

1920 年代半ばからは梅原北明が『文藝市場』（編集人・梅原北明、発行人・伊藤敬次郎→上森健一郎、文藝市場社、1925 年 11 月～1927 年 5 月、同年 6 月より梅原北明の個人雑誌となり、故書屋坂本書店を発行元として 9 月まで 4 号を発行、全 22 冊）、『変態資料』（編集兼発行人・上森健一郎、文藝資料編集部、1926 年 9 月～1928 年 6 月、全 21 冊）、『グロテスク』（1928 年 11 月～1931 年 8 月・全 21 冊）『カーマシャストラ』（編集／サー・フレデリック・ジョーンズ、発行／張門慶、1927 年 10 月～1928 年 4 月 全 6 冊＋別冊 1³）などを次々に創刊し、当局からの厳しい弾圧のなかで出版活動を続ける。斎藤昌三『36 人の好色家』（有光書房、1973 年 4 月）は、「彼は家宅捜索を受けること数十回に及び、刑法適用を受けた件数二十五、出版適用のもの十二種、罰金の合計は当時の金で一萬一百円以下、体刑五年以下という出版人としては稀な履歴の主となつたので、三田署の刑事は常時駐在という、名誉ある社員も一人出来たが、それを北明は却つていいことにし、発送の荷造りから、郵便局への手伝いまでさせるという明朗性で、大胆で無軌道でもあったが、部下にも家庭人にも温情があり、金銭上にも清廉であつた」と記し、出版人としての北明を面白おかしく綴っているが、戦前における彼の活動が戦後日本のカストリ雑誌や性風俗雑誌に多くのアイデアを与えたことは間違いない。

1941年に日本生活心理学会を創設した高橋鐵は、戦後、多くのカストリ雑誌に性心理学や精神分析学の記事を寄せつつ『赤と黒』を創刊している。また、日本生活心理学会を母体としてタブロイド新聞型4頁冊子「共学資料」を発行して幅広い世代の性愛体験や夫婦生活記録を掲載した。1949年には『あるす・あまとりあ』で性交体位六十二型の解説を行い60万部のベストセラーとなる（同書はシリーズ化され、累計で100万部を超えたといわれている）。1952年には『人性記 日本インテリゲンチヤー千名の懺悔録』（第1巻）をまとめ、同時代における性の実態を暴いた。1953年には『相対会研究報告』に倣った会員誌『生心レポート』（正式名『SEISHIN REPORT』、1953年7月～1964年8月、全35冊）を創刊している。こちらも会員は「医師が四三%、教職員が三一%で、あとは法曹関係者、宗教家、作家、画家、ジャーナリストなど」だった。著名人では山本周五郎が会員だったほか、客員として大江健三郎、開高健らが名を連ねている。入会資格は基本的に不問だが、自身の性遍歴を申告することが義務付けられていたという。

その他、高橋鐵は1950年代だけでも『生活文化』（編集兼発行人・広橋梵、1953年2月～1954年5月、全14冊⁴⁾）、『造化』（造化研究会、編集／広橋梵→川崎清一、発行／川崎清一、1954年7月～1955年4月、全10冊）、『新生』（新生活研究会、編集兼発行人・川崎清一、1955年～1956年〔奥付がないため正確な発行月是不詳〕・全5冊）などの雑誌を主導し、生涯を通じて「性の伝道者」（鈴木敏文『性の伝道者 高橋鉄』河出書房新社、1993年11月）としての信念を貫いた。性のタブーをことごとく破壊することで公権力に抗った。本稿は戦後の性風俗雑誌を取めたデータベースの解題であるため、これ以上深く掘り下げることはできないが、戦前の梅原北明がそうであったように、高橋鐵もまた日本に性革命をもたらした先覚者だったといえるだろう。

2 『夫婦生活』の登場

雨後の筍のごとく出現しては消えていったカストリ雑誌ブームが終焉し、GHQ/SCAPによる検閲が徐々に緩くなりつつあった1949年、アングラ雑誌とは縁のない家庭生活者に狙いを定め、いくつかの画期的なアイデアをもって登場したのが『夫婦生活』（鱒書房→夫婦生活社→家庭社、1949年6月～1955年6月、創刊号は144頁、定価60円 ※本稿が対象とする『夫婦生活』は1955年6月に終刊となるが、同誌は、その後も出版社を替えたりタイトルを一部変更したりして1970年頃まで発行された）である。敗戦直後、森正蔵『解禁昭和裏面史 旋風二十年』（鱒書房、上巻・1945年12月、下巻・1946年2月）のヒットで出版界の寵児となっていた増永は、かつて菊池寛が手がけた『話』（文藝春秋社、1933年4月創刊）の版權を譲り受け、1948年11月号で「夫婦生活」という特集を組む。その反響の大きさに勇気を得た増永は、鱒書房と同じビル内にわざわざ別会社を作って雑誌『夫婦生活』を創刊する⁵⁾。

アメリカの雑誌『セクソロジー』などに着想を得た増永は、判型をA5判からB6判に替えて紙のロスを極力減らすことを考える。内容に関しても、ありきたりな実話、秘話、読物を止め、学者や文化人が専門的な知識をもとに夫婦の性生活に関するアドバイスをするスタイルに改める。創刊号の執筆陣には、高木健夫、村岡花子、式場隆三郎、大浜英子、新居格、渋谷秀雄、丸木砂土といった著名人の他、医学博士、大学教授、厚生省の役人などが並んでいる。グラビアにはドモンケン（土門拳）をはじめとする著名な写真家を起用しビジュアル面にも力を入れる。主な記事を概観しただけで、不能、不感症、初夜、性感、性病、婦人病、包茎、ホルモン剤、強姦、貞操といった単語が並んでいる点にも特徴がある。

また、『夫婦生活』は表紙に「二人で読む実益家庭雑誌」というキャッチコピーを掲げることで、それまで男性が占有していた性愛雑誌を寝室で読む夫婦和合雑誌に変えた。読者のなかに女性を取り込むことで美容や化粧品に関する広告を獲得することにも成功した。片手で読める小型判にすることで記事から得た情報は寝室での「実益」とリアルにつながった。『夫婦生活』は、雑誌の形態のみならず読書行為のあり方そのものを劇的に変容させたのである。同誌の成功に色めきたった出版人たちは、すぐに『デカメロン』『モダン夫婦読本』『愛情生活』『モダン生活』『夫婦の生活』『夫婦実話』といった模倣誌を誕生させ、新たな読者の獲得に乗りだす。

カストリ雑誌がそうであったように、夫婦和合雑誌の流行にも当時の世相が大きく影響している。戦後の新憲法では男女平等が原則とされ姦通罪が廃止された。民法においても家父長的な家制度が見直され、夫婦を単位とする家庭という考え方が広く浸透した。優生保護法の制定にともなう産児調整、避妊薬や避妊具の市販を認める薬事法の改正なども加わり、性科学や性愛のテクニックに関する知識が求められるようになった。夫婦の性愛は男性の一方的な欲望ではなく相互的な営みとして認識されるようになり、お互いの身体や欲望に対する理解を深める必要が生じた。時代は夫婦のセックスに関する新しいモデルを必要としていたのである。

したがって、これらの夫婦和合雑誌はカストリ雑誌のような煽情性をカムフラージュし、「医学雑誌」を名乗るものが多かった。「医学雑誌」と銘打つことで性器や体位をあからさまに図解して見せることもできた。既成のエロ雑誌が、当局の取り締まりを逃れるためにさまざまな修辞を駆使して肝心なところをベールに包まなければならなかったのに対して、それらは時代の要請に応じた啓蒙雑誌を装うことで堂々と生き延びることができたのである。

もちろん、『夫婦生活』が人気を博した要因のひとつは志村立美による表紙画、寺本忠雄の色刷り連載「夫婦草紙」、ヌードグラビアであり、実際、男たちが持ち込んだのは夫婦の寝室ではなく愛人との情事においてだったのではないかと推測してしまうところもあるが、いずれにしても、同誌が夜の営みの潤滑油として活用されることを目的に編集され、結果としてそれが大変な反響をもたらしたことは事実であり、戦後日本の風俗史研究において記憶されるべき出来事であると考えられる。

なお、『夫婦生活』には若き日の高倉一も編集者として関わっている。同誌で編集者としての腕を磨いた高倉は、1960年に『風俗奇譚』や『画報風俗奇譚』（文献資料刊行会）を創刊したあと檸檬社を設立（1961年）し、1970年代には『黒の手帖』『GULLIVER』『SM ファンタジア』などを次々に手がけている。1984年には日本で唯一のSMとフェティシズムに特化した会員制図書館である風俗資料館を開館して初代館長を務めた。

だが、いつの世にもアイディア商品の周辺には類似品がつきまとう。さきの紹介したような玉石混交の夫婦和合雑誌が乱立したことで、『夫婦生活』は読者を飽きさせないためのより刺激的な内容を求められるようになるのである。青木正美は「カストリ雑誌は生きている——古書店の棚に見る性風俗誌四十年の興亡」（『新潮45』1988年1月）のなかで、「この判のエロ雑誌の中で最もよく売れたのは新本でも古本でもやはり『夫婦生活』である。その他に、多少の稀少価値も加わって高く売れたのは『デカメロン』、その増刊号から始まった『モダン夫婦読本』『怪奇雑誌』などのうち、昭和二十六、七年度のものだった。もっと正確に言うとも昭和二十七年夏までのものがよく売れた。というのも、この時期の雑誌の文章・挿画の表現内容が最もきわどかったからである」と回顧している。『夫婦生活』の終刊号（1955年6月）には「終刊の辞」が掲げられ、読者への感謝が綴られているが、同号は所蔵機関も限られているため、ここではその全文を引用する。

本誌『夫婦生活』が創刊されたのは昭和二十四年五月であるから、本号で丁度満六周年に当る。国家社会の

単位が家庭にあり、家庭の基本が夫婦生活にあることは今更いうまでもないが、夫婦生活を理想的に営むことが如何に困難であるかは、日々の新聞紙上に著名人の破婚やトラブルが屢々報ぜられることによつても明かである。そして、夫婦生活の破綻の大半が、表面的理由はいろいろあつても、実は性生活に原因する場合が非常に多いのであつて、家庭裁判所における事例がこれを裏書きしている。したがつて、性的無知を啓蒙し、正しい性知識の普及を図ることは、世の夫婦生活の不幸や悲劇を救うために是非とも必要なことであつて、本誌刊行の目的もここにあつたのである。一方、わが国の人口増加率は憂慮すべきものがあり、産調思想の普及は一日もゆるがせにし得ないものがある。六年間に亘る本誌発行が、多少ともこうした問題解決に寄与貢献をなしたことは、顧みていささか喜びとするところである。／ただここに問題は、一般市販の雑誌が性問題を扱う場合、必然的に青少年に悪影響を及ぼすかどうかということである。青少年に全く無害な方法によつて一般既婚者に性的啓蒙を行うことは不可能に近く、あらゆる努力にも拘らず、われわれは現段階においてこの矛盾を解決することが出来なかつた。廃刊を決意するに至つた理由である。／六年間を通じて、最高潮時には発行部数三十万部を超え、昨年四月を除いては唯一回の故障もなく刊行を続けて来たことは、一つには愛読者諸賢の御支援と、一つには執筆に当つて幾多の苦心を重ねて下さつた諸先生の御配慮の賜ものであつたといえよう。だが、夫婦生活の向上と青少年の問題との連関は、今後に残された課題である。前号に本誌廃刊を公表したところ、全国の愛読者から夥しい数の哀惜と続刊希望の書面が殺到した。長い間、本誌に寄せられた愛読者諸兄弟の筆舌に尽し難い御厚情に対しては、唯々感謝感激のほかはない。終りにのぞんで、各位の御多幸を祈るとともに、ここに、謹んでお礼を申述べて廃刊の御挨拶にかえる次第である。

ここには、戦後日本が抱えていた課題と『夫婦生活』という雑誌が果たしてきた役割が端的に示されている。夫婦の性生活というデリケートな領域において、豊かな知識と適度な刺激を与えることの大切さと、そうした啓蒙活動が青少年に悪影響をもたらしてしまうことへの懸念が率直な言葉で語られている。多くの読者に愛されつつも社会の浄化運動の風圧に耐え切れなかったことへの無念さが綴られている。それは、『夫婦生活』がいかに明確な理念をもった雑誌であつたかを逆説的に裏付けている。戦後日本にはあまたの性風俗雑誌が誕生し、消えていったが、六年間という継続期間においても個々の記事の質においても、『夫婦生活』は正しく戦後出版文化史に記憶されるべき雑誌だといえるだろう。

3 『人間探究 文化人の性科学雑誌』と『あまとりあ 文化人の性風俗誌』

1956年5月の売春防止法成立以降、日本のセックスモラルは、衛生や産児調整を念頭に置く既婚女性のそれと旧来の純血主義や貞操観念からの解放を求める未婚女性のそれに分割され、売春や性産業で生きる女たちを家族主義の敵対者として表象していく傾向が強まる。セックスをめぐる情報が用途別に分かれていったことで、雑誌メディアも細分化せざるをえなくなった。

こうした時代の動向を考えると、新しいスタイルの性風俗雑誌として注目したいのが、『人間探究』（第一出版社、1950年5月～1953年8月）と『あまとりあ』（あまとりあ社、1951年3月～1955年8月）に代表される「文化人」のための性科学誌、性風俗誌である。カストリ雑誌が一攫千金を求めた山師たちの草刈り場であつたのに対して、両誌は高橋鐵が実質的な編集を担い、プロのスタッフがそれをサポートする体制だった。医者、学者、文筆

家を主な執筆者とし、専門家の見地から性の歴史、文化、技巧を論じるものが多かった。性愛の探究を下劣な欲望の発露と捉えるのではなく、知的な「文化人」の趣味嗜好として再定義するところに両誌の特徴があった。

しかし、そこは商売である。「文化人」のためだからといって、本当に高尚なものだけを追い求めていたのでは読者がついてこない。当然、読者の官能を刺激するための工夫が随所に凝らされている。性科学、性心理学を隠れ蓑にしたエロの探究という側面もある。つまり、読者の疑問や期待に応え、知的好奇心を充たしつつ、同時に煽情的な気分にもさせてくれるような内容になっているのである。

さきに創刊された『人間探究』は、改造社の編集局長を務めたのち『小説界』（小説界社、1948年6月～1949年12月）を発行した佐藤績が知己の高橋鐵を主幹として創刊したものだが、佐藤自身はGHQ/SCAPによるパージを受けた立場だったため、編集発行人の名義は石川四司^{しし}となっている。木本至は『雑誌で読む戦後史』（新潮選書、1985年8月）に、「昔、懸賞小説に入選した時の主人の筆名が石川四司だったのです。主人は早大から改造社へ。ええ上林曉さんと同期入社です。主人がパージを受けたのは山本実彦社長の身代わり。人が好いのです。一番傾倒していたのは永井荷風先生、担当作家でした。『人間探究』の時は、『改造』編集長が性の雑誌を始めた、と妙な目で見られました」という佐藤績未亡人の証言を載せているが、それは当時の出版界を考えるうえで極めて重要な問題をはらんでいる。1951年10月13日に公職追放を解除された言論出版関係者（221名）のなかには、元の職場に復帰できないまま別名で大衆雑誌に転じる人々が少なからずいたということである。

『人間探究』の特徴のひとつは、特集テーマを掲げたことである。いま試みにそれを列挙すると、「青年苦の分析」（1号）、「結婚苦の徹底分析」（2号）、「女の解剖」（3号）、「世界無比の性愛エピグラム集！『末摘花』研究」（4号）、「変態性欲の研究」（7号）、「女体と性生活」（9号）、「性と犯罪」（11号）、「女の性的魅力」（14号）、「女体の急所」（15号）、「性の悩み解決号」（19号）、「戦争と売淫」（23号）、「艶本の研究・第一輯」（別冊）、「男色秘図―同性愛研究―」（28号）、「艶本の研究・第二輯」（別冊）、「変態自殺・性愛心中」（31号）、「エロ化するアメリカ」（1953年6・7月合併号）、「同性愛は現代病か」（1953年8月号）となっている。

また、『人間探究』では、読者の投稿とそれに対するコメントという双方向的な記事が多い。1951年1月号からはじまる「性と性格についての質疑・相談規約」では、高橋鐵自らが質問者ひとりひとりに向けて率直に語りかけている。このコーナーは大きな反響をよび、のちに高橋鐵『せくくす・かうんせりんぐ 精神分析による女性の相談解決実例集』（あまとりあ社、1960年2月）などにつながる。主な執筆陣は高橋鐵以下、青山繁、青山俊文二、池田文痴庵、伊藤晴雨、岡田甫、岡本薫、小倉ミチコ、尾崎久彌、小野常德、神近市子、斎藤昌三、坂ノ上言夫、白銀万雅野、原比露志、藤澤衛彦、伏見沖、雪吹周、丸木沙沙土、峰岸義一、三宅一郎、宮尾しげを、宮武外骨、武野藤介、森銑三、矢野目源一、山路閑古、吉田精一、吉田機司（アイウエオ順）であり、戦前に梅原北明らが手がけたエログロナンセンス系の出版物に関係していた人物、それぞれの業界で高い評価を得ている学者、専門家が数多くいる。ただし、創刊時から主幹を務めていた高橋鐵は1952年7月号を最後に同誌への寄稿をしていない。編集方針をめぐる意見の対立があったのではないかという推測もあるが詳細は不明である。

一方、式場隆三郎『夜想』（1946年7月）や舟橋聖一『満月』（1947年9月）で人気を博していた大元社の久保藤吉は、高橋鐵が率いる日本生活心理学会（のち全国的性学会となり機関誌『生心リポート』などを発行）の活動に共鳴し、高橋鐵の著作を世に送り出すためにあまとりあ社を設立する。中田雅久の編集で出された高橋鐵『あるす・あまとりあ 性交態位六十二型の分析』（あまとりあ社、1949年11月）の成功に背中を押された久保は、同じ高橋鐵が編集に携わる『人間探究』のライバル誌として『あまとりあ』（1951年3月～1955年8月、全54冊+臨

時増刊2冊)を創刊する。つまり、両誌は同じ時期に創刊されたライバル誌でありながら、もとをたどっていくと高橋鐵が控えているという構図になっているのである。

ただし、古代ローマのオラウィディウスが性愛^{アマトリア アルス}の技術を謳った詩「Ars amatoria」に由来する『あまとりあ』は、特に、日本や世界に古来から伝わる性愛の文学、文化、習俗の再評価をコンセプトとしており、埋もれた文献資料、艶本、艶画などの紹介に力が注がれている。主な執筆者には、高橋鐵以下、池田文痴庵、伊藤晴雨、大場正史、大宅壮一、岡田甫、小野常德、加藤芳郎、川上三太郎、北里俊夫、五島勉、斎藤昌三、武場隆三郎、武野藤介、南部僑一郎、林家正楽、平山蘆江、古川ロッパ、正岡容、丸木砂土、三宅一朗、矢野目源一(アイウエオ順)がおり『人間探究』と重複する著名人も多いが、全体の傾向としては、読者自身が必要としている知識や情報を正しく把握し、医学、心理学、生理学などを踏まえながら、より豊かな性生活を提案する『人間探究』に対して、『あまとりあ』は文学、歴史学、民俗学の観点から文献資料を読み解いていこうとする記事が多い。また、もともと製本屋から出発し、印刷会社を兼ねた大元社を経営していた久保藤吉は、必ずしも雑誌出版に通じているわけではなかったため編集は須磨利之に任せ、自身は得意とする印刷技術を駆使して鮮やかなグラビアなどを挿入した。なかでも、有名な浮世絵の木版模刻はマニア垂涎の附録となり、額装したものを高額で転売する商売人もいたようである。

なお、ここで『あまとりあ』の編集長を務めた中田雅久は、その後、戦後廃業した博文館を継承した博友社に入って1950年7月号で終刊となる『新青年』最後の編集長となる。1958年には『マンハント』編集長を務めるとともに、『えろちか』(三崎書房)のプランニングにも携わっている。

4 ゾッキ本と定期購読雑誌

1953年9月1日、それまでの独占禁止法が一部改正され出版物の再販制度適用がはじまる。1954年7月には、深刻なデフレで出版社の倒産整理が続出し、処分された特価本の乱売となる。そこに登場したのが、取次店から返品された書籍や雑誌を格安で売り捌くゾッキ本業者である。

一般に、雑誌は広告料を算出するため発行部数を確定し、売れ残ったものは回収して裁断されることが多いが、返品を現金で引き取ってくれる特価本卸業者が増えたことで、零細資本の出版社は新たな商売の芽をつかむ。会社ぐるみの副業として、最初からゾッキ本として流すことを前提とする雑誌の製作に乗り出すのである。最新号が出たら旧号が廃棄されてしまうような定期刊行物ではなく、特集の企画や記事の内容さえ面白ければ持続的に売り続けることができるムック⁶のような大衆雑誌を量産し、広告に依存せず雑誌の売り上げだけで利益があがる仕組みをつくること。それはインフレに喘ぐ出版業界にさした一筋の光であった。「出版界`情事の終り、風俗雑誌盛衰十年史」(『サンデー毎日』1955年5月15日)という記事を読むと、「一冊当りの原価計算の内訳は、紙代三円、製本代八十銭、紙型代七十銭、本文の印刷代一円五十銭、表紙とグラビアの画料、製版、印刷紙代全部ふくめて四円、しめて一冊平均十円四角の原価になる。ゾッキ問屋への卸値が十二円、小問屋へ行って十四、五円、小売屋へは十七円くらい、そして小売屋の店頭売は二十五円ないし三十円で売られるわけ。この計算でいくと、製作者の純益は一冊当り二円、一点二万部として四万円、それをひと月に四、五万部も作ってしまうのだから、月にしてザッと二十万を稼ぐ勘定になる」とあり、はじめてゾッキ本として製作された雑誌がいかに儲かる仕組みになっていたかがわかる。

また、過激な内容を含んだ性風俗雑誌の取り締まりは必ずしも明確な基準でなされていたわけではなく、目をつけられた雑誌が適当な理由で摘発されたり、見せしめのような処分がなされたりすることが多かったため、出版社としては自主規制を強化し特定の購買者以外の目に触れないようにする必要もあった。新刊書として堂々と書店に並べると、どうしても多くの人の目についてしまうが、ゾッキ本や古雑誌として専門の書店に流したり発送したりすれば必要としている人だけが雑誌にアクセスでき、一般の人々の生活に影響を与えることはないからである。

こうしたゾッキ本や古雑誌は出版業者のみならず読者にとっても一定のメリットがあった。ひとつは、もちろん安価だということである。特価本販売書店、露店、古本屋を回ればひと山いくらの単位で安価に購入できたため、買えるだけの雑誌をリュックサックに詰め込んで、それを地方に運んで流通させるような運び手も多くいた。だが、それと同時に重要だったのは、一般書店に並ぶ新刊雑誌と違って人目を気にせず入手できたこと、読み終えた雑誌を再び業者に引き取ってもらうことで家族などにも知られずにすんだことである。最新号への拘りさえ捨ててしまえば、読みたいものを安く入手することができるようになったことである。

さらに、ゾッキ本の流行を考えるためには、占領末期の日本において猥褻物頒布の罪（刑法 175 条⁷）がどのように運用されていたかを知る必要がある。戦後、目に見えないかたちで出版物に対する検閲を行ってきた GHQ／SCAP は、占領政策の遂行を妨げる言動に対して厳格な制限を加える一方、科学的、客観的な根拠に基づく性の表現については知識の涵養を推奨する傾向があった。人々が愛し合うこと、その結果として性愛が描かれることは、社会秩序の安定という観点から奨励されているところさえあった。実際、占領期に出版された、テオドル・ファン・デ・フェルデ『完全なる結婚』（大洋社、1946 年 10 月に柴豪雄と酒井敬一による完訳が出たあと、同年 11 月に神谷茂数と原一平による抄訳が刊行され、特に低価格だった後者は爆発的に売れた）や、A・C・キンゼイ著／永井潜、安藤晝一訳『キンゼイ報告 人間に於ける男性の性行為』（コスモポリタン社、上巻 1950 年 2 月 1 日、下巻 1950 年 5 月 11 日）は押収や発禁処分の対象にならなかった。

だが、1949 年 10 月をもって CCD（民間検閲局）が解散したことで性を奔放に語ることを禁忌とする日本社会の旧弊な認識が再び前景化する。それを象徴するのがチャタレー裁判である。1950 年 9 月、D・H・ロレンス著／伊藤整訳『チャタレー夫人の恋人』（小山書店、1950 年 4 月）が猥褻物頒布の罪（刑法 175 条）に問われ、出版元社長の小山久二郎と翻訳者の伊藤整が起訴されるという事件が起こる。その後、最高裁の上诉棄却によって罰金刑の有罪判決が確定（1957 年 3 月 13 日）するまで、出版界は刑法 175 条の解釈に対する司法の判断を見守ることになる。また、この裁判をめぐるのは多くの文学者、知識人が批判の声をあげ、「猥褻」と「表現の自由」をめぐる議論が活発になる。この裁判は結果的に出版元と翻訳者の敗訴というかたちで閉じられるが、それまで当局が恣意的に行っていた刑法 175 条のあり方を問い、司法に「猥褻」の定義を示すように迫った点に価値がある。「猥褻」とは「徒らに性欲を興奮又は刺激せしめ、且つ普通人の正常な性的羞恥心を害し、善良な性的道義観念に反するものをいう」という定義を引き出し、性愛を語ること自体が問題なのではないという結論を得たことに意義がある。

司法の後押しを受けた出版界は性愛科学書ブームに沸く。性愛の欲望や性技を科学的に記述したものであれば処罰されないという認識が広がったことで、性風俗雑誌を手がける多くの出版社が『完全なる結婚』や『キンゼイ報告』を模倣した企画を打ち出す。のちの謝国権『性生活の知恵』（池田書店、1960 年 6 月）などはそのわかり易い事例である。もちろん、当局もそうした状況を容認するはずはなく、青少年対策協議会（1949 年設置、1950 年からは中央青少年問題協議会に改組）を中心に青少年保護育成運動を展開する。「猥褻」を争点にするのではなく、「青少年保護」という立場で悪書撲滅をめざす。

こうして、1950年代の性風俗雑誌はゾッキ本として流通させることを前提に大量に発行される安価で新味のない雑誌と、特定の定期購読者や会員向けに少数を印刷してひと目につかないかたちで長く継続させようとする雑誌に二極化する。後者に関しては、女体の豊満な肉体画を表紙にして男性読者を煽情的な気分にするだけの安直なエロの追求ではなく、SM、同性愛、スカトロジー、フェティシズム、人体改造などに細分化され、それぞれの趣味にあった専門雑誌が作られるようになる。

全国から定期購読者を募って発行される性風俗雑誌の特徴は、真剣な愛好家の嗜好を満足させるため、極めて専門性が高く細部に至るまで手の込んだ編集がなされていることである。いちど飽きられてしまったら定期購読そのものを打ち切られてしまう以上、編集サイドには、読者が求めているものの本質を掴むことが求められた。世間から白眼視されることを懼れながら暮らしている読者の心情を理解し、信頼関係を結ぶ必要があった。小田光雄が飯田豊一へのインタビューというスタイルで構成した飯田豊一『『奇譚クラブ』から『裏窓』へ』（論創社、2013年11月）のなかで、飯田は「エロを売り物にしている雑誌であっても、上からの目線で変態に魅せられる人間を侮蔑し、嘲笑するニュアンスが必ず含まれていた。それらの人々を差別し、社会の敵として罵倒し、時には犯罪者扱いし、娯楽の材料、対象とすることで、小説や記事や読物に仕立てる。そうした編集の根底にあるのは変態性愛者たちに対する好奇心と優越感だけだ。マニアと同じ位置に立ち、手をさしのべ、味方になることを誌面に示している雑誌は皆無だった」と指摘しているが、それは1950年代の性風俗出版においても見失ってはならない視点だった。この時期、定期購読者向けに発行された雑誌はいまも古書店市場に流通しているものが多いが、それは読者のなかに長期間に亘って雑誌を大切に保管していた人々が少なからずいたからである。

5 『風俗草紙』

戦後の性風俗雑誌において「読物」とともに人気を博したのは「実話」ものと呼ばれる記事である。もともとは1930年代に登場した『実話雑誌』『実話時代』『実話読物』などがその源流だが、今回のデータベースのなかにも、『真相実話』『内外旬報』『旬刊タイムス』『内外特報』『夜よむ新聞』『読切雑誌』など「実話」を売り物にしたものが数多くある。逆にいえば、「実話」ものはいつの時代においても通俗雑誌のメインストリームであり、読者は本当のことを感じさせてくれる記事に弱かったということである。

だが、これらの雑誌に掲載された「実話」の多くは実際に起こった犯罪や事件に取材したものではなかった。やや時代は下るが『図書新聞』（1957年11月30日）に掲載された「実話雑誌の実話」という記事を読むと、戦後雑誌における「実話」の多くは米国の犯罪・猟奇雑誌をアルバイト学生に翻訳させ、それを然るべき実話作家に潤色させて記事にしたものだと言われている。また、『実話ストーリー』『読切実話』などの編集者だった三河内三郎も、のちに「ライターは、内外タイムス、毎夕新聞、国民タイムスなどの夕刊紙の記者が多かった。むろん、本職のもの書きもいた。また、ストリップ劇場の支配人や演出家なども常連執筆者だった。／エロを売り物にするといえ、それはあくまで「刑法第七十五条」の範囲内にとどめ、編集長が全部の原稿に目を通し、強い部分をチェックした」（『エロ雑誌編集者と呼ばれても』『月刊ペン』1977年10月）と証言している。

こうした「実話」ものの限界に気づき、いち早く見切りをつけたのが、1953年7月に『オール実話』増刊号として発行された『風俗草紙』（日本特集出版社、1954年10月まで、改題前の『オール実話』として3冊、『風俗草紙』として14冊を発行）である。同誌の最大の特徴は、特定のマニアだけを対象とし、マニアとの信頼関係を築く

ことで恒常的に売れ続ける雑誌をめざしたことである。「実話」という名のもとに読者を騙すことがあたり前だった性風俗雑誌の常識を壊し、むしろ、一般読者を排除することで雑誌の価値を高めようとしたことである。『オール実話』から『風俗草紙』への改題は、ある意味で、戦後の性風俗雑誌が細分化されていく分水嶺ともなっているのである。

『風俗草紙』の仕掛け人は夜久勉という人物である。1948年4月に日本文芸社を設立した夜久は、出版物を発行しつつ、同時に特価本の卸業と小売業をするために日本読書普及会、夜久書店を立ちあげる。卸業と小売業を兼ねることで経費を削減するとともに、自社の出版物をロスなく流通させることを考えたのである。『全国出版物卸商業協同組合 三十年の歩み』（編集兼発行人・八木敏夫、全国出版物卸業商業協同組合、1981年6月）には、夜久書店のことが「夜久勉氏が姫路の駅前に小売店新興書房を開いたのが、終戦の翌年二十一年六月。本が払底していた時なので、京都、大阪、東京と仕入れに歩き、姫路へ送っていました。やがて単身上京、姫路の店は実兄夜久義重氏に委ねて、卸を開始。大阪などに小売店をつぎつぎに出店、卸として仕入れたものを小売りすることにウエイトをおく商売の仕方でした。二十三年出版部として日本文芸社を設立、大衆遊技場「人生劇場」の開設など、多角的な経営を行い、今日の隆盛の地歩を築きました」と記されている。

その夜久が最初に目につけたのは、『奇譚クラブ』で超人的な編集能力を発揮するとともに緊縛の絵師としても優れた才能を発揮していた須磨利之だった。『奇譚クラブ』は、1947年に大阪で曙書房を経営する吉田稔が、夕刊紙専門の京都中央新聞社で編集記者をしていた須磨利之を誘って創刊したB5判のカストリ雑誌から出発している。当時、カストリ雑誌はすでに飽和状態となっており、活路が開けずにいた『奇譚クラブ』は須磨の提言でアブノーマル雑誌への転換を図る。ヨーロッパの性的風刺画を表紙画に採用し、SM的嗜好をもった読者層に特化した編集方針を取る。

もともと独学で緊縛のデッサンなどを学んでいた須磨はここで天才的な器用さを発揮し、ひとりで百点近い各頁のイラスト、カット、レタリングを悠々とこなすばかりか、優れた文章力を駆使して多くの小説や読物や囲み記事を仕上げてしまう。なかでも喜多玲子の名で描いた挿絵は伊藤晴雨に賞讃されることになる。

それまでB5判の不定期刊行だった『奇譚クラブ』は1951年3月号から月刊となり、同年7月号からA5判となる。こうして刷新された『奇譚クラブ』は日本ではじめてのSM雑誌として固定的な読者を獲得することになる。1951年1月発行の「異色愛欲譚特集号」をはじめ同誌はたびたび摘発の憂き目にあうが、出版社を替えながら1975年3月まで四半世紀以上に亘って継続される。1950年代半ばには沼正三「家畜人ヤプー」（1956年12月から）の連載がはじまり、三島由紀夫、埴谷雄高、澁澤龍彦、寺山修司らに賞讃される。江戸川乱歩も『奇譚クラブ』の熱心な読者だったらしく、旧蔵資料のなかには1952年後半から1953年を中心に21冊確認することができる。

だが、東京で出版社と特価本業者を兼ねて幅広い事業を展開していた日本文芸社の夜久勉から誘いを受けた須磨は、さきにも述べた通り、喜多玲子の筆名で『風俗草紙』（日本特集出版社、1953年7月～1954年10月）に画や告白文を書くとともに、同誌の実質的な編集を担うようになる（『風俗草紙』の奥付には「編集人・氏家富良」とあるが、これは須磨が『奇譚クラブ』の吉田稔に配慮して自身の名を伏せたのだろうと考えられる）。1954年秋には上京し、『風俗草紙』の廃刊を見届けたあと、久保書店が手がけていた『あまとりあ』や『裏窓』の編集に携わる。つまり、須磨利之という人物の動きを見ていくことによって、『奇譚クラブ』『風俗草紙』『あまとりあ』『裏窓』の各誌がひとつの水脈でつながるのである。

もちろん、こうした事例は性風俗出版史におけるほんのひとコマに過ぎない。ある人物が数多くの雑誌を転々としながら新しい雑誌を立ちあげ、さらに、そこで育った人材が別の雑誌を作っていく事例は枚挙にいとまがない。

結局、アングラに属する性風俗雑誌の研究は資料や証言を通して明らかになった事実をひとつひとつパッチワークのように貼り合わせて模様を完成させていくような地道な取り組みによってしか進捗させることができないということである。須磨利之の半生は、まさに創刊と廃刊を頻繁に繰り返しながら読者に向けてシグナルを送り続けるしかない性風俗雑誌の宿痾を物語っているのである。

話題を『風俗草紙』に戻そう。須磨利之をはじめ、八木静男、中川彩子、秋吉響など同時代を代表する絵師を揃えた夜久は、SMの嗜好をもった読者を想定した編集をする。1953年9月号に掲載された伊藤晴雨の「女体の縛り方十五種」（資料番号 1-3-5）に代表されるように、同誌のコンセプトはビジュアル系のSM誌そのものだった。1954年2月号の「後記」には、「女性を虐なみたいというサジストの願望・愛する女に思いきり虐められたいというマゾヒストの夢、女の下着の中に埋まつて眠りたいフェチストの欲望、その他もろもろのマニヤ諸兄の願望」を叶えたとあるが、それはある意味で画期的な宣言だったといえる。戦後日本におけるSM誌の系譜は、『奇譚クラブ』を経て『風俗草紙』において開花したといってもよいのではないだろうか。

ただし、当時の社会状況を考えると『風俗草紙』のように過激なグラビアが並んでいる雑誌を書店の店頭に並べるのには相当の覚悟が必要だったと思われる。そこで夜久は、出版、卸業、小売業を展開する自社の特徴を生かし、SM愛好者が密かに雑誌を入手できるようにしようとする。積極的な宣伝活動は行いつつ、定期購読会員になることを勧める仕掛けを用意する。『奇譚クラブ』の「KK通信」に倣った『(通信) 風俗草紙』（会費は一ヵ月50円）を発行したり、『風俗草紙』の誌上に「愛読者通信」欄を設けたりして会員相互の交流を促進する。たとえば、『風俗草紙』（1954年2月）の「愛読者通信」にある「小生四十二歳のサジストです。現在市の中位の貿易会社の課長であり、妻とは二年前に死別、子供も一人ありますが、未だ再婚の意志なく、秘かにマゾ的女性を求めて悶々としてをります。何卒読者中に適当な方があれば、御紹介下さい。／小生の嗜好は残虐に走り勝な鞭打などより緊縛とくすぐり責めで、美しい女性が縛られ、身を悶える姿に無限の美を感じます。但し交際にはあく迄紳士の行動をとりますから御心配は要りません。（横浜市 M・T生）」という投稿をみればわかるように（資料番号 1-9-30）、『風俗草紙』は、まさにSM的嗜好をもった読者同士の出遭いの場としても活用されているのである。

だが、猥褻物頒布の罪（刑法175条）の適用が拡大されつつあった時代において、当局がそれを黙認するはずはない。実際、『風俗草紙』の誌面を見ると目次に記された頁数と記事のノンブルが食い違っている号がある。恐らく、すべての原稿の版下を作成したあと削除や修正の指示が入り、慌てて誌面を繕ったために生じたズレだと思われる。こうして、当局から嫌がらせを受けた『風俗草紙』は、わずか一年余りで休刊を余儀なくされるのである。

『夫婦生活』がそうであったように、『風俗草紙』もまた雑誌の売れ行きの伸びていくにしたがって似通ったタイトルの模倣誌が数多く登場する。本コレクションに収められた『風俗科学』（編集兼発行人・西條道夫、第三文庫、1953年8月）、『風俗クラブ』（編集兼発行人・秋房醇、春光社、1954年3月）などがそれに当たる。たとえば、『風俗クラブ』創刊号の「編集後記」（資料番号 3-1-18）に「半年分御申込の方には「責めに喘ぐ女の写真二枚一組、一年分御申込の方には五枚一組を贈呈致します」とあることからわかるように、これらの後発誌は雑誌本体に加えて、さまざまな付録やサービスで販売促進を図っていた。装丁や判型も本家の『風俗草紙』とそっくりであり、文字通りの二番煎じである。

また、これらの雑誌は女性の下着姿やヌードのグラビアを多用している点でも特徴がある。その傾向は1956年4月に「性科学を中心とした図解風俗誌」のキャッチフレーズで創刊された『100万人のよる』（季節風書店）へと続き、やがてカラーのヌードグラビア全盛時代を迎えることになる。それはすでに性風俗雑誌というよりも成人男性

向けのエロ雑誌である。当時の出版界は、日本書籍出版協会の設立によって「低俗な興味に迎合して文化水準の向上を妨げるような出版は行わない」（出版倫理綱領、1957年10月27日）ことを誓っていたし、売春防止法の施行（1957年4月1日）を受けて社会の浄化運動に貢献しようとする姿勢も見せていたが、性風俗雑誌を手がける新興出版社は活字からグラビアへの転換を図り、より直截的なエロを追求するようになっていったのである。

こうして、1950年代後半の性風俗雑誌は、活字からグラビアへの移行と読者の嗜好に合わせたジャンルの細分化が同時に進行する。発行部数を増やすためにより大衆化していく雑誌と、マニアのためにコアな内容を追求する雑誌に分かれていく。特に後者に関しては、一般の人々の目につかないアングラ雑誌として地下茎を延ばしていく。

6 おわりに

1920年代以降、性風俗雑誌は常に検閲や取り締りの対象として当局から監視されてきた。出版人たちは言論弾圧と対峙するために様々な工夫を凝らしながらエロを求める読者に雑誌を届けてきた。もちろん、その過程では刑法175条をめぐる裁判闘争もあったし、悪書追放運動にもさらされた。社会からの偏見はいまもなくなっていない。だが、そこに人々の欲望が鮮やかに表出していること、人間とはどのような存在なのかを考える契機があることは間違いない。性愛を禁忌とし幻想としての規範から逸脱した存在を異端として排除したり、蓋をしてはじめてからそのようなものはなかったことにしたりするような思考は、世界から多様性を撲滅することに加担するという意味において極めて危険である。少なくとも、出版文化研究の領域においては、ありのままの事実を直視し、事実の蓄積によって検証・分析を試みていく姿勢が不可欠である。

その意味で、ここに誕生した「社会文化史データベース——性風俗稀少雑誌コレクション」は性風俗雑誌の研究において必要不可欠なものになるはずである。性風俗雑誌に関しては国立国会図書館をはじめとする公的資料保存機関に所蔵されていないものが多く、会員制図書館である風俗資料館などでしか目にするできない雑誌が数多くある。長年に亘ってこのジャンルの文献資料を蒐集してきた好事家、マニア、コレクターなどが独自のデータベースを構築して情報発信している事例は少なからずあるが、いずれも目次情報や関連する言説の紹介が中心であり、雑誌の誌面そのものをインターネット上で自由に見ることができる環境にはない。

性風俗雑誌を通して、日本の近代およびそこに生きた人々の営みを探求するためには、データベースを育てていくという発想が不可欠である。すでに多くの文献資料をもっている人たちが密かな愉しみのために抱え込んでしまうのではなく、いったん画像データだけは提供して現物の雑誌は自分の手許に置くという二つのレベルでの保存・公開が重要になる。戦後占領期や1950年代に活躍した出版関係者の多くが物故しつつあるいま、研究は体験者による証言の時代から資料をもとにした探求の時代に変わりつつある。このデータベースが今後も拡充し、そこから新しい研究のアイデアが生まれてくることを期待したい。

¹ 1941年、政府は出版流通統制のため240社あまりの取り次ぎを日本出版配給株式会社（通称・日配）に集約し、国策会社とすることで出版物の流通をコントロールした。戦後、過度経済力集中排除法を施行したGHQ/SCAPは、1947年3月、日配に閉鎖期間令を出すが、突然の活動停止によって出版界は混乱に陥り、多くの出版社が倒産した。

² GHQ/SCAP による検閲の布告は 1945 年 9 月 10 日に行われ、順次検閲が開始されたが、同じ占領期であっても検閲の形態は、(1) 事前検閲 (1945 年 9 月～)、(2) 事後検閲 (1947 年 8 月～)、(3) CCD (民間検閲局) 解散以後 (1949 年 11 月～) に分かれている。

³ インターネットサイト「閑話究題 XX 文学の館」(URL は補記参照) には雑誌の画像とともに、『カーマシャストラ』の目次情報が掲載されており、「上海で印刷発行した No. 1 を除く全冊発禁処分を受けている。No. 2 は出来上がった時点で押収され、新たなものも印刷屋のストライキで遅れに遅れたため、仮綴の別冊と言う形で本冊より先に頒布されているものがある。発行年月他の記載がないため不明な点が多いが、新年度の挨拶を兼ねた会員通信「号外附録」が残っていることから、昭和三年一月早々の頒布と思われる。急いで作ったためか、収載されて入る第一篇の扉ではなく、本文からノンブルが振ってある等の混乱が見られるのはやむを得ない仕儀か。No. 6 は頒布前に全冊押収されているので現存するものは無い筈である」と解説されている。

⁴ 大正中期から昭和にかけて「第三次木曜会」が集めた性体験資料に戦後のメンバーである高伴作が個人的に収集した資料を合わせた「高資料」コレクションを掲載して注目された。

⁵ 当時、『夫婦生活』編集長だった駒込公平は、『『夫婦生活』始末記』(『文藝春秋』1957 年 8 月) のなかで、「創刊号九万部 (増刷も含み) から、毎月三万部か五万部ずつふえ、その年の暮れにだした新年号は、一挙に三十五万部に達したのである。もっとも、この号は、少しヤマをあてこみすぎて、三十五万部刷りながら、かなりな返品を見ているが、それにしても、終刊号にいたるまで、もっとも悪いときでも十萬部を割らなかったというのであるから、それだけでもいかに特異な雑誌であったかはわかる」と証言している。

⁶ ムック (mook) は magazine (雑誌) と book (書籍) との合成語。一般に、「書籍の販売で、在庫を持ち、いつでも注文に応じられる」こと、「返品フリー入帖」であることを前提とし、内容的は「増刊、別冊と同類、あるいは一つのテーマで雑誌的編集がなされているもの」(紀田順一郎『新版 本の情報事典』出版ニュース社、1991 年 1 月) とされている。

⁷ 現在では平仮名で「わいせつ」と表記するが、本稿では同時代の表記をそのまま用いている。

※本稿の執筆に際しては雑誌の現物を閲覧できなかったものが少なからずあり、インターネット上のデータベースからも多くを学んでいる。なかでも、「SMpedia SM 大百科事典」(<https://smpedia.com/index.php?title> 2022 年 4 月 7 日参照)、「閑話究題 XX 文学の館」(<http://kanwa.jp/xxbungaku/index.htm> 最終更新日 2015 年 12 月 15 日) は有益なサイトとして活用させていただいた。もちろん、同データベースで得た情報に関しては、あらためて文献資料で検証することを心がけた。